



デュシャンの迷宮へようこそ

ベサン・ヒューズ 《リサーチ・ノート：デュシャンを読む》

Case 4 ではウェールズ出身のアーティスト、ベサン・ヒューズ(Bethan Huws, 1961-)を取り上げます。ベサン・ヒューズはロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)などで学んだ後1990年代からパリやベルリンを拠点に創作活動を開始、アイデンティティや言語、翻訳をテーマとする平面、立体、映像、インスタレーションを発表しています。これまでヴェネツィア・ビエンナーレのウェールズ代表(2003)や、マーストリヒト・ボネファンテン美術館(2006)、ロンドン・ホワイトチャペル・ギャラリー(2011)、ベルン美術館(2014)など世界各地の美術館で個展が開催されています。今回はこのヒューズのライフワークをまとめた形で紹介する国内では初めての機会となります。

ベサン・ヒューズの《リサーチ・ノート：デュシャンを読む》は2007年から開始されたマルセル・デュシャンをめぐる思考過程をマインドマップとして提示したプロジェクトです。A4用紙に記された数々のデュシャンの言葉や作品についての膨大な調査メモやドローイングは、美術史研究者によるアプローチとは異なり、必ずしも明確な論理や秩序をもっているわけではありません。数字や色、図像学的モチーフをデュシャンがどう扱ったのか、フランス語と英語を往来しながらそれぞれの単語と音の関係をどのように作品に取り込んでいたのかといった点について、ことば遊びを巧みに取り込むデュシャンの術をていねいに紐解いていきます。ベサン・ヒューズの試みは、観る側としてのアーティストの断片的思考の集積であり、デュシャン本人の言葉を借りれば、作者と観る者という二極の間で成立する作品についての「創造的解読」として理解することができます。デュシャンとヒューズがつくりあげた言葉とイメージの迷宮をどうぞお楽しみください。 牧口千夏(当館主任研究員)